

# 中国新石器文化研究の動向

樋 口 隆 康

## 一、序

中国における新石器文化の研究は、一九二一年、スウェーデンのアンダーソンが河南省仰韶において彩陶を発見したときにはじまり、一九二八年には山東龍山鎮城子崖の黒陶文化が知られたことは、みな承知済のことであるが、その後の發展はきわめて遅々としていた。一九四九年中華人民共和国の成立後、中国考古学界は面目を一新し、眞の科学としての考古研究の段階にはいつた。それは各地の新建設工事にともなう多数の遺物の出土を、完璧な組織によつて調査、整理したことによるといえるであろう。そのうちでもとくに新石器時代の文物の出土が著しく、この五年間に数百カ所の遺跡が発見され、ほとんど各省に及んでいる。私たちがこんどの中国訪問の際、各地の博物館で、その地方の出土品としてほとんどもれなく実見したのも、この新石器時代に属する遺物であつた。したがつて、この方面に対する研究が、中国においてにわかに活気を呈した

ことも無理からぬことであつて、これまでのアンダーソン一辺倒からはなれて、これを批判し、新石器時代文化の新しい体系を確立せんとする試みがなされた。<sup>1)</sup>私はその現状を實際にみる事ができた機会に、かれらの研究の現状と今後の方向をながめてみたい。

## 二、仰韶文化と龍山文化

従来中国の新石器文化は彩陶文化と黒陶文化との両語によつて代表されていた。まずこの名称の不都合さについて、かねて私も問題にしていたわけであるが、中国学者もこの点を論議している。<sup>2)</sup>彩陶や黒陶という言葉はこれらの文化の有する特質の一つをしめすが、そのうちの陶器のすべてをさすわけではなく、また別の系統の文化のうちに、彩陶や黒陶と呼ばれる土器が存在するので、この用語を文化名として使うのは適當でないとして、最初の発見遺跡地名をとつて、仰韶文化、龍山文化と呼ぼうとしている。世界の各地の原始農耕文化にはひろく彩色を施された土器が

存在するのであり、また殷、周時代にも黒色を呈した土器があり、それらをもまた彩陶、黒陶と呼んでいる現状においては、中国の新石器時代の二つの代表文化を、土器の種類で呼ぶのは、たしかにまずい。ただ問題はその範疇如何である。それについてはあとでふれよう。

ところで仰韶文化に関して、最大の論点は、アンダーソン編年に対する批判であろう。彼が彩陶文化を齐家期、半山期、馬廠期、辛店期、寺窪期、沙井期の六期に編年したのは、甘粛省の各遺跡出土品を中心として組立てたものであつた。これについての批判も、やはり甘粛省における新たな調査があすかつていいる。すなわち、第一には一九四四年から五四年にかけて行われた夏鼐氏の甘粛省一帯にわたる広範な調査がある。なかでも注目すべきは、寧定県陽窪湾において齐家文化の墓葬を発見し、その墓の墳土中から甘粛の仰韶式彩陶片を出土したことである。これは齐家文化を半山より新しいとする有力な証拠である。また寺窪遺跡では、火葬の存在が知られ、仰韶系の彩陶文化とはちがつたこの文化の性格を、少数民族である氐羌族の原始文化ならんと推測した。次いで裴文中氏は一九四七年から四八年にかけて、渭河、洮河、大夏河の各流域の考古調査をおこない、齐家文化の遺跡から白灰面をさぐり出しなどした。最も新しくは、五六年に蘭州西南方の劉家峡ダム工事関係の考古調査が安志敏氏らによつておこなわれ、一〇〇を越える先史遺跡が発見された。

これらの成果により、今日では甘粛仰韶文化についてのアンダーソンの見解は、大きく修正されることになつた。いま安志敏氏の論文によつてその概略をうかがうと、第一に甘粛の先史文化はきわめて複雑で、アンダーソンの説のごとく同一系の彩陶文化が六期に年代的に移行するというようなものではない。純粹に彩陶文化の流れをくむものは、六期のうちの半山期と馬廠期だけであつて、これを甘粛仰韶文化と称し、それ以外のものは決して分期をしめすのではなく、全く別の系統の文化を代表する。すなわち、少数民族の原始文化であろうと考えているが、そのうち齐家文化はさきに半山文化よりもおくれることをしめしたが、さらに劉家峡ダム地区の永靖県張家嘴吳家において、辛店文化層が齐家文化層の上面をおほつていいる事実がたしかめられ、辛店文化よりも古いとして、ここに甘粛仰韶文化—齐家文化—辛店文化という編年が科学的に確認されることになつた。ほかの寺窪文化や沙井文化は辛店文化と併存する別種の文化であつて、とくに前者は夏鼐氏の調査によつて知られるごとく、地方的な原始文化ではないかといつていいる。さらに劉家峡地区の調査によつては、同じような地方文化として、東郷自治県唐汪川山神の遺跡を代表とする唐汪文化、山丹県四壩の四壩文化の二つを新たに設定していいる。

われわれは蘭州の文物管理委員会でも多数の彩陶のコレクションをみた。出土地の明かでない収集品のほかに、蘭州

市白道溝坪、同蘭工坪、永登県紅砂溝などの出所の明かなものも存して、それらを概観すると、半山式、馬廠式が圧倒的に多く、それにまじつて齐家式、辛店式のものもみとめられた。さきの安志敏氏の説は大体北京の考古研究所を中心とする人々の見解を代表するとおもわれるが、これに異説がないわけではない。第一にあまりにも仰韶文化というものを狭義に解することの可否であるが、これについては後述するとして、蘭州市蘭工坪駝駝卷の馬廠期彩陶に夾砂粗紅陶の甕がともない、永登県で半山式の彩陶とともにアンフォラ式の無文の細泥紅陶双耳壺がでているなど、まだまだ複雑なようである。齐家文化の処置についても、石興邦氏などはつきりこれを甕山文化の中に入れている。

これは日本の学者もかねてから主張しているところであるが、甘肅省秦安県三里舖寺咀坪第二号住居址は齐家期のもので、縄文のある甕や白灰面の断片がでてゐる。白灰面は仰韶文化にはなくて、甕山文化に属する一つのマルクマールであるとすれば、この説もまたすてがたい。

甘肅東南部は中原地区と西北地区の仰韶文化の關係についての重要なキイポイントである。われわれは蘭州から西安まで汽車で下つたが、定西附近までは純然たる乾燥高原地帯で、樹木のほとんどない黄土の平原に、浸蝕された深い道路や、崖面の穴居住居などをながめていたが、隴西で渭河の流域にはいつてくると、急に樹木の緑が多くなつてきて、その変化の著しいのに一驚した。地形的には、陝西

と同じ地域に入るものとおもわれる。西安で、甕山文化に属する陶鬻が渭河流域まで存在するということを聞いたときも、当然のことと察せられた。

陝西省では、もつとも重要な仰韶文化遺跡として西安の半坡村遺跡がある。灑水に近い小台地をしめるこの遺跡は、石興邦氏を中心とする考古研究所西安分室の工作隊が調査し、仰韶文化としてはじめて大規模な聚落址が発掘された。数層にかさなる竪穴址をみごとにほりあげ、いまそのままの形で博物館をつくつてゐる。この遺跡の詳細については報告にゆずるとして、この土器で注目されるのは小児用甕棺に彩陶を蓋にし、縄文の粗陶を身とした組合せが注目される。一体彩陶はみがかれた土器、飾られた土器である。これらは貯蔵用としても台所ではなく茶間か客室におかれるべきもの。したがつてこれと組み合わさるべき台所用の粗質土器こそもつと究めらるべきであろう。その点でこの二つの組合せは注目される。このほかに蔣秉琦氏らが調査された西安附近の開瑞莊、馬王村などの新石器時代遺跡では、仰韶文化と甕山文化が層位的に堆積していた事実が発見され、これまで河南でみとめられていた層位が、陝西においてもあてはまることが確かめられた。ここでも飾られた土器にともなう縄文のある大甕や甕がでてゐる。

河南省にはいると、すでに知られているごとく、仰韶文化と甕山文化の層位的な關係がつかまえてゐる。最近

もつとも注目せられているのは西部の陝隰の近く、三门峡のダム工事にともなう綜合調査である。ここでも兩文化の累積がみとめられる。仰韶文化は、河南式の広口の鉢が多く、文様は荊村あたりにもつとも似ており、彩陶としては、最古の段階かとおもわれる。甕山文化では、灰陶が多く、黒陶は少ない。文様も条文、繩文が多く、方格文が少ない。卵殻式の薄手も少ない。これは河南省の甕山文化の通じた特色である。鄭州や成皋の調査も注目される。ここでは仰韶文化の層位から卵殻式の薄陶片が出土する。色は黒もあり、紅もある。器形には杯が多い。これらはいままで甕山文化に属するものと誤られていたが、白沙や洛陽、禹県などの仰韶文化にもあつて、黄河南岸に分布する同系統文化の一つの特色であるとも考えられる。

さきの安志敏氏の説などで見ると、仰韶文化というものをきわめて狭義に限定して、河南、河北、山西、陝西をふくめた中原地区と甘肅、青海を包括した西北地区にわけ、しかも齊家、寺窪、沙井の各文化や、東北地方の貔子窩、湖北省の京山などの彩陶を含む諸文化も別系統のものとして除いている。しかるに甕山文化に対しては、きわめて広義に解し、山東のテイピカルな類のみならず、西は河南、陝西のもの、南は江蘇、浙江の厚手黒衣陶にいたるまでをふくめている。これは基準のおきかたに混乱があるわけだ、もし狭義に解するならば甕山文化も薄手黒陶、陶鬻をともなうテイピカルなものに限定すべきであり、もし広義

に解するならば、仰韶文化には、やはり彩陶を伴う多くの文化を包括すべきであらう。どちらかに一定しなければ、兩者の比較は徒勞にすぎない。齊家文化を甕山文化に含めるか否かも、いつに基準如何によるといえるであらう。

### 三、地方の新石器文化

従来中国の原史時代の編年としてあげられる仰韶文化—龍山文化—殷文化という移り行きは、主に黄河流域を中心とする地域に限られたものである。しかしあくまで広い中国においては、ほかの地方の原史文化についても当然考慮されなければならない。それに対しては、これまで長城地帯以北の細石器文化と、東南沿海地区の印紋硬陶文化の二つが代表的なものとして挙げられていた。しかしこんどひろく巡つてみて、各地にはそれぞれ特色のある文化の存在することを知つた。江蘇省花庁村、南京附近の陰陽宮、同湖熟鎮、福建省曇石山、湖北省天門県石家河など、いずれも粗質の紅陶ながら、器形に変化のある三足器や注口土器が多く、それにまじつて鬻形器や彩文の存在もみられる。とくに陰陽宮からは多数の玉製品が出土していて、そのうちに日本の繩文式時代にみると同じ形の玦状耳飾が出土していたのは注目されよう。四川省成都でも新風水観音遺跡出土の土器は黄灰色をした粗陶で、手づくねの盃などにまじつて、三足の注口土器がでてゐる。広東省の広州ではさらに豊富な出土品がある。印紋の硬陶よりも古い時代に夾

砂粗陶、泥質陶の存在が知られており、博羅県角洞水庫の石矛、海豊島の土製支脚などが彌生式文化を思わせるようなものである。

これら各地方の先史文化が時間的に黄河流域とどれ位のずれがあるかを考慮しなくてはならない。新石器文化といつても必ずしも殷代より遡るものではない。たとえば印紋硬陶文化にしても、浙江省良渚鎮で龍山文化層の上にある、湖南省長沙では戦国墓の填土中から、その破片が出土したなどの屬位的証拠から、大体の年代が殷以後、戦国以前にあたる事が知られている。しかし、ほかの大部分の地方文化は、何ら実年代を推しうる具体的証拠をもつていない。したがって、反証としては中原文化の地方波及の状態をさぐる事が一つの方法である。たとえば殷代の文化は最近の出土例からみて、河北、山東、河南、山西、陝西、安徽の各省に及んでいたことが知られている。西周代の文物は江蘇省まで南下していた。戦国時代の文化は湖南省から四川省にも及んでいた。広東附近では、戦国の遺物もあるにはあるが、きわめて乏しく、漢代になつて急に中原文化が増加している。このように各地における中原の歴史時代文化の波及の状態をさぐる事によつて、先史文化の終末の時期を推定することができるであらう。

註① 斐文中『中国石器時代的文化』（一九五四年）

尹達『中国新石器時代』（一九五五年）

安志敏『中国新石器時代的物質文化』（文物參考資料、一

九五六の八）

② 馬承源「中国新石器時代的物質文化」一文商榷（文物參考資料、一九五七の二）

安志敏「關於中国新石器時代物質文化的幾個問題」（同前）  
夏鼐「齊家期墓葬的新發現及其年代的改訂」（中国考古學報五、一九五一年）

④ 夏鼐「臨洮寺窪山發掘記」（中国考古學報四、一九四九年）  
安志敏「甘肅遠古文化及其有關的幾個問題」（考古通訊、一九五六の六）

⑥ 考古研究所西安工作隊「新石器時代村落遺址的發現西安半坡」（考古通訊、一九五五の三）

考古研究所西安半坡工作隊「西安半坡遺址第二次發掘的主要收穫」（考古通訊、一九五六の二）

⑦ 蘇秉琦・吳汝祚「西安附近古文化遺存的類型和分佈」（考古通訊、一九五六の二）

⑧ 黃河水庫考古工作隊「黃河三門峽水庫考古調查簡報」（考古通訊、一九五六の五）  
同 「一九五六年秋河南陝縣發掘簡報」（一九五七の四）

⑨ 安金槐「鄭州地区的古代遺存介紹」（文物參考資料、一九五七の八）

⑩ 夏鼐「河南成皋廣武區考古紀略」（科學通報二の七、一九五二）  
⑪ 尹煥章「華東新石器時代遺址」（一九五五年）